

ツヴェターエワとレズビアニズム —「女友だち」から「アマゾンへの手紙」まで—

中 尾 泰 子

1914年の10月にソフィヤ・パルノークと出会ったマリーナ・ツヴェターエワは、その直後から連作詩「女友だち」を書き始める。しかし、同性の恋人に捧げられたこのテクストは、彼女の存命中に世に出ることはなかった。といっても、女性の同性愛を含め、当時のロシアにおいて「性」について語るものがタブーだったわけではない。

ではツヴェターエワにとってレズビアニズムを表象するという行為は具体的にどんな意味を持っていたのだろうか。また、ツヴェターエワのレズビアニズムに対する認識は時を経るにしたがってどのように変化していったのだろうか。

本論では、まず今世紀初頭の文学における同性愛のテーマについて概観し、次いでツヴェターエワの「女友だち」と「アマゾンへの手紙」という二つのテクストを中心にこれらの問題について考察する。

1. 今世紀初頭における文学と同性愛

今世紀初頭のロシアでは性をテーマとする作品が相次いで発表されたが、その前提には、売春、近親相姦、姦通など性に関する「犯罪」を取り締まる法制度改正の動きがあったということが考えられる。¹ それらの「犯罪」は近代的家族制度を脅かすと見なされていたのである。法律の改正は1903年のことで、その3年後から、男性の同性愛を描いたミハイル・クズミンの『翼』(1906)、近親相姦を扱ったミハイル・アルツィパーシェフの『サーニン』(1907)、売春をテーマとしたアレクサンドル・クプリーンの『魔窟』(1部, 1909, 2部, 1914-15)などが出版されている。

ここでまず、当時のロシアにおける同性愛の位置を確認したい。この頃、主にドイツやオーストリアのセクソロジー(性科学)に関する文献がロシアで次々に翻訳・紹介されていた。² 当時セクソロジーは医学の名のもとに同性愛を性心理上の異常に帰していた。もっとも、「革命前の数十年間のロシア社会は、同性同士の愛という問題に対して著しく寛大だった」³ とサイモン・カー

中尾泰子

リンスキーは述べている。ただし、「同性同士の愛」と一括りにしてしまうのはあまりに大雑把で、危険ですらある。「男性同士の愛」と「女性同士の愛」とは別個のものとして扱わなくてはならないだろう。なぜなら、女性同士の愛——レズビアニズムは、主に男性同士の愛を意味するホモセクシュアリティと違って「不可視のもの」（存在しないはずのもの）だったからである。

ロシアでは同時代の西ヨーロッパ諸国ほどホモセクシュアリティを弾圧する傾向は見られなかったことは、すでに広く知られている。男性の同性愛に関する病理学の文献が存在していたにもかかわらず、立法者は男性のいわゆる「性的逸脱者」を行政の面からも治療の面からも抑圧することはなかった。⁴ また、法律家のウラジーミル・ナボコフやワシーリー・ローザノフのような思想家がホモセクシュアリティを擁護していた。ただし、ローザノフは結婚を構成する不変的な部分の一つとして「種の保存」を挙げており、人類が墓に行くよりは男色者がそこへ行くほうがよいと述べていることを付け加えておこう。⁵

1906年に出版されたクズミンの『翼』は時代のこうした空気をよく反映しており、男性同性愛者の苦悩といったものとはほとんど無縁のテキストである。ここには、嫉妬に狂う醜悪な女性を登場させるなど、ある種の「女性嫌悪」とも呼ぶべき視線が挟み込まれており、上流階級に属する男性同士のコミュニティの審美的側面がいやがうえにも強調されている。

一方レズビアニズムは、セクソロジーにおいて男性同性愛ほど重要ではないとされていた。女性の同性愛は男性のそれに比べるとはるかにまれなものと考えられていたからである。⁶ また、文学においても、ボードレーを始めとするフランス・デカダンスがレズビアニズムを扱っているためか、それはもっぱら「外国のもの」と受け止められていたようだ。それゆえ、ロシアには存在しないはずのレズビアニズムを言説によっていかに「実在のもの」として表象するかが、作家にとって当面の課題となった。レズビアニズムを語る伝統がなかったために、その新しい表現形式が必要とされたのである。

『翼』の翌年には女性同士の恋人たちを描いたリディヤ・ジノヴィエワ＝アンニバルの『三十三の畸形』が発表され、そしてソフィア・パルノークがレズビアニズムを歌った詩集を次々に世に送り出すことになった。

2. 「女友だち」——女性同士の愛の表象

ツヴェターエワがレズビアンであったかどうかという議論は現在でもなされ

ツヴェターエフとレズビアニズム

ているが、本論ではその問題はひとまずわきに措きたい。ツヴェターエフをレズビアンでないと断じる研究者たちは、彼女の女性との恋愛関係が一時期に限られていることや、彼女自身にレズビアンの自覚がなかったことなどを論拠として挙げているようだが、そもそも「レズビアン」とは「何者」なのか、そのことをこそ問うべきだろう。「レズビアン」自体、セクソロジーをはじめとして、社会が一方的に押しつけた枠組みであることを忘れてはならない。

本論では、ツヴェターエフとパルノークとの恋愛関係といった伝記的な事実には拘泥せずに、あくまでツヴェターエフの言説によって、いかに女性同士の愛が表象されているかに論点を絞って検討することにしたい。ツヴェターエフはテキストにおいて、実際には存在した夫も子供も登場しない女性だけの世界を創り出しているからである。

また、女性が女性のために恋愛詩を書くという行為自体は、言うまでもなく、目新しいものではないことも付け加えておきたい。そのような詩には長い伝統があり、一昨年から昨年にかけてイギリスで、数世紀にわたって書かれた作品を収めたアンソロジーが出版されている。⁷

さて、十七篇の詩から構成された「女友だち」(1914-15)は、女性二人の出会いから別離までを描いている。その恋愛の物語の詳細な分析も重要であろうが、ここではまず、そこで描かれる女性同士の恋愛が、いかに男性性／女性性の境界線をあいまいにし、ジェンダー(社会的・文化的性)を不確かなものにしていくかに注目したい。

「女友だち」について、カーリンスキーは「これらの詩における内なる葛藤は、女性同士の愛の拒絶や社会的制裁への恐れなどとは一切関係がない」⁸と述べているが、そこまで言い切れるのだろうか。そこでまず、このテキストがどのような読者を想定して書かれているのかを考えてみたい。それによって、ツヴェターエフにとって女性同士の恋愛を描くことがどのような意味を孕んでいたかが明らかになるだろう。

あなたは幸福なの？— そう言うはずがない！ そんなことはないはず！
でもそのほうがまだ— それならそれでいい！
あなたはあまりに多くの人とキスを交わしたようだ
そのための憂い
〈…〉
私はあなたを愛している— 雷雲のように
あなたの頭上には— 罪がかかっている—

中尾泰子

あなたが嘲笑的で辛辣で
他の誰よりも素晴らしいから
〈…〉

この震えゆえに — 本当に
私は夢を見ているのではないのか? —
この皮肉な魅惑ゆえに
あなたが — 彼ではないという

(1, 216)

第一篇からの引用だが、「あなた」が女性であることは第二聯で十分に示唆されているのに（「若き悲劇の女よ」）、「私」の性は明らかにされないまま、最終行で「あなたが — 彼ではないという」と書かれている。さらに、そのことは「皮肉な魅惑」だとされている。

研究者たちはこの最終行を「最も衝撃的で、おそらく最も重要」⁹であるとか、「その恋愛のホモエロティックな本質」を「明らかにする」¹⁰と述べている。なぜこの一文が「衝撃的」なのかを考えてみると、研究者たちがいみじくも言っているように、「ホモエロティックな本質」が明らかにされたからであろう。逆説的に言えば、恋愛詩における「私」と「あなた」は異性同士であるというコードに慣れた研究者（読者）の慣習的な読みがここに透けて見えるのだ。「女友だち」は出版を前提とせずに書かれたと言われるが、¹¹ ツヴェターエワはこのテキストの読者をあらかじめ想定していた。「あなたが — 彼ではない」、つまり「皮肉」なことに男性ではないことに「衝撃」を受けるような典型的な異性愛の読者を。カーリンスキーは「女性同士の愛の拒絶や社会的制裁への恐れなどとは一切関係がない」と述べたが、ツヴェターエワは恋愛詩における「異性愛的な」読みを見通し、それを覆すような仕掛けを第一篇の最終行に用意しているのである。

また、「女友だち」で注目すべき点は、女性の側からの女性の身体に対するまなざしである。当時、女性は文学においてもまだ男性作家から「見られる」「描写される」存在であった。ところがツヴェターエワは「女友だち」の第九篇で次のように言う。ここでは二人が最初に出会った時の様子が描かれている。

黒い絹の甲冑のような — あなたの服
ジプシーのように少しかすれた声
私はあなたのすべてが痛いほど好きだ —
あなたが美しい女でないということさえも!

(1, 223)

ツヴェターエワとレズビアニズム

「私はあなたのすべてが痛いほど好きだ——／あなたが美しい女でないということさえも！」。社会的に見れば、女性の美の基準は時代によって推移するものである。たとえば、1910-20年代には、女性の髪型や化粧の傾向は作家たちのイデオロギーや美に対する熱望と不可分であったと言われている。¹²「美」「美しさ」とは、伝統的に「女性性」の記号なのである。文学においても女性の身体が絶えず客体として男性の視線にさらされてきたことは今さら言うまでもないだろう。女性の身体は、スーザン・ボードの言葉を借りれば、まさに「女らしさのテキストとしての身体」¹³なのである。しかし、この力強い愛の宣言によって、ツヴェターエワは女性の美を崇める幾多の恋愛詩を一蹴してしまう。女性の身体の価値を男性ではなく、女性自身が決めようとしているのだ。「女友だち」では女性の身体が従来コードから見事に解放されている。

この他にも、「女友だち」には「あなた」の身体の描写がちりばめられている。「額の高い悪魔」(第一篇)、「おお オパール指輪をはめた／優雅な手」(第七篇)、「弓なりのくすんだ唇は／気まぐれで弱々しい／だが突き出たベートーヴェンの／額は目もくらむばかり」「皮鞭の似合う手」「弓にふさわしい手が／絹に隠れ／唯一無二の手／美しい手」(第八篇)、「あなたの弓なりの唇を／その一段と増した傲慢さを／重々しい眉の張り出しを私は見る」「ベートーヴェンの額をした未知の女！」(第九篇)、「そして重たげな赤い兜の下の／権力欲に満ちたあなたの額」(第十篇)、「あなたの威圧的な／この手を愛していたと」(第十三篇)、「そして踊る炎のようなまなざしがある……／濡れた深い口角の／暗く歪んだ口がある」(第十四篇)。

ジノヴィエワ＝アンニバルの『三十三の畸形』では、女性同士の恋人が登場しながら、二人の肉体的な特徴は「美しい」ということ以外ほとんど語られることはない。それに対して、ツヴェターエワの「女友だち」では、従来女性の美の基準にあてはまらないような身体について同性の恋人の目から明らさまに語られる。「あなた」の赤い髪は「赤い兜」に喩えられ、その下の「突き出した」額は二度も「ベートーヴェンの」と形容されている。第九篇で「あなたの服」が「甲冑」に喩えられていることを考え合わせると、「あなた」はまるで「兵士」であり、それはイメージの上では「異性装」とさえ言える。また、「傲慢さ」「権力欲」「威圧的」がこれまで恋愛詩において女性を賛美する言葉であったことがあるだろうか。

しかし、「あなた」を非常に「男性的な」イメージを帯びた言葉で描写しながらも、ツヴェターエワは「あなた」を次のように捉えている。「女の優しさ

中尾泰子

少年の大胆さ」(第九篇)、「女でもなく少年でもなく／けれども私より強い何か」(第十篇)。伝記的な事実はわきに措くと述べたが、ここでは「あなた」をパルノークという前提で検討したい。ツヴェターエワはともかくとして、パルノークはかなり自覚的に「レズビアン」であることを引き受けようとしていた。では、「レズビアン」とはいったい何者なのか。ツヴェターエワはここで一つの答えを提示しているようだ。すなわち、「レズビアン」とは「女でもなく少年でもない」ばかりか「女でもあり少年でもあるのだ」。これはあくまでもツヴェターエワの見解だが、彼女にとって、レズビアンであるパルノークは、男性／女性という二項対立を超越する存在であり、セックス(生物学的性)やジェンダーに疑問符を付すような存在だったと言えるだろう。それが、結果的に「女友だち」というテキストに様々な揺らぎをもたらしているのである。

さらに、「私」と「あなた」との関係がどのように表現されているかを見よう。

そして私は自分の外套の

長いけばをなでた — 腹を立てることもなく

あなたの小さなカイは凍りついた

おお 雪の女王よ

(1, 219)

いかに私がああなたの細い指を

けだるい頬で撫でたことか

どんなにああなたが私を坊やと呼んでからかい

そんなあなたが私を気に入っていたことか……

(1, 221)

アンデルセンの童話を下敷きにした第五篇では、「雪の女王」である「あなた」に対して「私」は「カイ」少年に喩えられ、また第七篇では「私」は「あなた」に「坊や」と呼ばれている。「私」を「少年」に同一化させているからといって、ここで女性同士の愛が「男一女」という異性愛関係を反復し、模倣しているとは単純に言い切れないが、性が流動化されていることは確かだろう。

最後に「女友だち」の全体の構成について考察したい。この連作詩は「私」と「あなた」との「レズビアンの」関係を歌った詩と、そうでない独白的な詩とから成っている。異性愛の読者は、女性同士の恋愛に対して、とかく「覗き見的な」関心を抱きがちだが、ツヴェターエワは読者のそのような嗜好までも感じ取っていたかのようだ。第五篇では女性同士の三角関係が描かれている。

ツヴェターエワとレズビアニズム

あなたはもう別の女（ひと）と一緒にだった
 彼女とともに櫓の道を切り拓いていた
 待ち望んでいた愛おしい女（ひと）とともに —
 私よりも強く — 待ち望んでいた女（ひと）とともに (1, 219)

さらに第七篇では、「私」と「あなた」の性的な関係がほのめかされている。

修道院の旅籠へ
 — 鐘のとどろく日没時に —
 名の日の女たちのように幸せに浸りきって
 私たちがいかに軍隊のように突き進んで行ったことか
 〈…〉
 いかにあなたが私の頭を押さえながら
 巻き毛を一つ一つ愛撫したかを
 いかにあなたの七宝のブローチの
 花が私の唇を冷えさせたかを (1, 221)

しかしその一方で、ツヴェターエワはこの連作詩の大半を「あなた」と共にいない「私」の独白にあてている。このことによって、「レズビアニズム」がテキストの単なる意匠ではないことが証明される。第十七篇を引用しよう。

思い出して下さい 私にとってすべての人々の頭よりも
 自分の頭の髪の毛一本のほうが大切だということを
 勝手に行きなさい…… — あなたも同じように
 あなたも同じように あなたも
 私を愛するのをやめて 何もかも愛するのをやめればいい！
 朝に私の番などしなければいい！
 私が穏やかな気持ちで外に出て
 風の中に立てるように (1, 228)

しかし、ここからも読み取れるように、「私」は同性を愛する自分のアイデンティティに真摯に向き合うことはなかった。このテキストの中の「私」は、異性の恋人との恋に破れるように、同性の恋人との破局を迎えるに過ぎない。それは、おそらくカーリンスキーの言うように、「私」が社会の「女性同士の愛の拒絶」とは無縁だったからかもしれない。つまり、「レズビアン」として迫害を受けなければ、葛藤も生じないのである。女性同士の愛は「女友だち」

中尾泰子

というテキストにジェンダーの揺らぎをもたらしたものの、「私」が「レズビアン」としての自分のセクシュアリティについてまで思い至ることはなかった。ツヴェターエワがこの問題に向き合うことになったのは、この20年後に書かれた「アマゾンへの手紙」においてであった。

3. 「アマゾンへの手紙」——レズビアニズムと母性との葛藤

ツヴェターエワがパリで亡命生活を送っていた頃、文学におけるレズビアニズムの表象にも変化が起こっていた。リリアン・フェダマンは『レスビアンの歴史』で次のように述べている。「しかし1930年代になると、ホール [『孤独の井戸』の著者ラドクリフ・ホール] が沈黙の一線を越えたおかげか、それともレスビアンの自覚をもつ女たちにとって、性愛はアイデンティティの一部として避けて通れない問題だと思ったからか、女を愛する女性作家たちは、性愛をもっと鮮烈な言葉で表現しはじめた」¹⁴。その『孤独の井戸』の登場人物のモデルとなったのが作家ナタリー・バーニーで、パリで彼女と交流のあったツヴェターエワは、1932年に彼女に捧げる形で「アマゾンへの手紙」(34年に改訂)と題するエッセーを書いた。

1910年代にすでに女性同士の恋愛を描いたツヴェターエワだったが、「アマゾンへの手紙」を読んでもみると、フェダマンが述べるような時代の流れに逆行しているかのように感じられる。たとえば、そこには死ぬまで共にあり続けた女性同士の恋人たちについて次のように書かれている。

〈…〉そして彼女たちの周囲にあるのは空虚さであった。子供のいない老いた「正常な」夫婦を取り巻く以上の空虚さが。〈…〉
ただ、ただ呪われた種族ゆえに (5, 490-91)。

このエッセーの中で、ツヴェターエワは何度か「正常な」という言葉を時には引用符に括って用いている。それは、「正常なもの」と「異常なもの」とを区別したセクソロジーを彷彿とさせる。また、引用した箇所でもツヴェターエワはレズビアンのカップルを「呪われた種族」と呼んでいるが、それはボードレールが地獄に落ちるレズビアンを歌った詩「呪われた女たち」を想起させる。このエッセーが「反レズビアン論文」¹⁵と評される所以である。

このエッセーで述べられている中心的な事柄は、年上の女と年下の女という恋人同士の愛は、年下の女の側に子供を持ちたいと願う母性が芽生えることに

ツヴェターエワとレズビアニズム

よって亀裂が生じるということである。1916年にツヴェターエワはパルノークとの別離に際して詩を書いたが、その中に「いにしえの日々 あなたは私にとって母のようだった」(1, 300)という一文がある。そして「アマゾンへの手紙」には次のような一節がある。「年上の女に子供は必要ない。彼女の母性愛のために女友だちが存在するのだ」(5, 487)。かつて「私」にとって「母」のような存在だった年上の「あなた」の母性愛は、年下の「私」にそそがれることによって満たされていたとツヴェターエワは言いたいのであろう。

ここでは、「アマゾンへの手紙」におけるレズビアニズムと母性との問題に注目したい。そこでは、実はセクシュアリティとジェンダーとが複雑に絡み合っているのである。なぜ、年下の女は年上の女を愛しているながら、彼女のもとを去って行くのだろうか。次の引用がその答えである。

男性を恐れ、女性のもとへ行き、子供を欲する若い女性の正常で、自然で、切実な例を挙げよう。それは異質で、無関心で、敵即ち解放者でさえあるものと、愛されている女即ち抑圧者との間で結局は敵を選ぶような女性。

愛することよりも子供を持つことを欲する女性。

自分の恋人よりも自分の子供を愛する女性 (5, 489)。

子供を持ちたいがために、「正常な」女は女性の恋人よりも男性を選び取り、何よりも子供を愛するものだとしてツヴェターエワは言う。「母性愛を十分に与えられていない女」は「例外的」なのだ (5, 488)。男性は「敵」ではあるが、子供を持たせてくれるという意味では「解放者」であり、女性に愛されていても、子供を持つことができなければ、それは「抑圧者」なのだ。母親である女性は「正常」であり、すべての母親は自分の子供を愛し、そして世話をするものだという、まさに「母性愛の神話」がここではツヴェターエワによって語られている。ツヴェターエワの頑迷とも言うべき「母性」への執着の背景には、パルノークとの別離があることは研究者たちも指摘している。その際、ツヴェターエワがパルノークとの子供を持つことを望んでいたにもかかわらず、それが叶えられなかったという伝記的事実が持ち出される。¹⁶

しかし、問題はそれほど単純ではない。レズビアンであることと母親であることの問題は、現代にも通じる複雑な問題を孕んでいるのである。両者の間には「次世代の再生産」という問題が横たわっているからである。現在では、レズビアンたちが養子をとることで、あるいは人工受精によって、子供を持つことはそれほどまれではなくなっている。しかし、ツヴェターエワが「アマゾン

中尾泰子

への手紙」を書いた時代の状況を考えれば、当時のレズビアンたちがレズビアニズムか母性かの二者択一を迫られたことは十分に考えられる。ツヴェターエワは「アマゾンへの手紙」の中で、子供を持つためだけに男性が必要であるかのようにも書いていたが（まさにアマゾン族がそうであった）、それは現在女性が結婚をせずに子供を持つことにつながっている。しかし、それでもなおツヴェターエワは書いている。「いつの日か彼なしで子供を持つことができるようになればよい。だが、私たちは決して彼女から子供を、愛すべき小さなあなたを持つことはない」（5, 490）。

「女友だち」を書いていた頃、ツヴェターエワは特に同性を愛する自分というものに向き合うことがなかったが、「アマゾンへの手紙」において初めて同性を愛するという問題に直面し、その問題に対して彼女なりに、手紙という形で答えを出したのだと言えるだろう。

結語

文学において女性同士の愛を表象することには、つねに困難がつきまっていた。レズビアンのセクシュアリティを語る伝統がなかったために、作家たちは新たな表現を模索しなければならなかったのである。

ジノヴィエワ＝アンニバルの『三十三の畸形』（1907）は、ロシアにおける「レズビアン文学」の嚆矢とも呼ぶべき作品だが、女性同士の愛が「狂気」と強く結び付けられており、ボードレールなどフランス・デカダンスの影響を感じさせる。¹⁷ そして、それはレズビアニズムを精神の病として扱ったセクソロジーにもつながりかねない危うさを持っていた。¹⁸

同時代で唯一自分がレズビアンであることを公にしていた詩人パルノークのレズビアニズムの表象は、まず「サッフォー」を現代に復活させることから始まった。初期の詩集でパルノークはサッフォーにまつわる作品を数多く書いている。確かに「サッフォーの末裔」というイメージは、パルノークのテキストに「レズビアニズム」を持ち込むことには成功したが、「サッフォー」というあまりに神話化された形象はレズビアンから性的なものを奪い、レズビアンまでも非現実的な神話的存在に封じ込めてしまう危険性を孕んでいた。

その中で、ツヴェターエワの詩「女友だち」は、女性同士の愛が男性性／女性性の枠組みをくずしていくようなテキストであった。読者が好奇の目を向けがちなレズビアンの「物語」それはつまり、女性同士の恋人の出会いと別離、

ツヴェターエワとレズビアニズム

性行為や三角関係などの場面を鮮やかに描写しながらも、「私」の「独白」を織り交ぜ、「狂気の」あるいは「神話的な」レズビアン像を作り上げてしまうことを免れている。

しかし、ツヴェターエワの女性を愛する姿勢は、その後の20年の間にソーネチカ・ホリデイらとの恋愛を経て変化していくことになる。ツヴェターエワはのちにエッセー「アマゾンへの手紙」を書き、レズビアニズムと母性との葛藤というテーマに取り組み、最終的に母性に軍配を上げることになる。そこには、ローザノフも『月光の人々』で言及したような、「同性愛」と「次世代の再生産」「生殖」という重大な問題が出てくるようになる。

「女友だち」ではレズビアニズムを称揚しながら、「アマゾンへの手紙」で一転それを攻撃する側に立ったかのようなツヴェターエワだが、この二つのテキストにおいては、異性愛が支配する世界（文学も含めて）における女性同士の愛の可能性とそしてその困難性を併せて提示したと言うべきであろう。

(なかお やすこ・筑波大学大学院)

ツヴェターエワの作品の引用は、Цветаева, Марина. *Собрание сочинений в семи томах*. М.: Эллис Лак, 1994 により、() 内に巻号, 頁数を記す。翻訳は中尾による。

注

- ¹ 法改正については Engelstein, Laura. *The Keys to Happiness: Sex and the Search for Modernity in Fin-de-Siècle Russia*. Ithaca: Cornell UP, 1992. Ch. 1, 2 を参照。
- ² Engelstein 132.
- ³ Karlinsky, Simon. *Marina Tsvetaeva: The Woman, her World and her Poetry*. 1986. Cambridge: Cambridge UP, 1988. 52 (サイモン・カーリンスキー『知られざるマリナ・ツヴェターエワ』亀山郁夫訳, 晶文社, 1992 も参照)。
- ⁴ Engelstein 57-71 に詳しい。
- ⁵ Розанов, В. В. *Люди лунного света: Метафизика христианства*. Изд. 2-е. 1913. М.: Дружба народов, 1990. 115, 145.
- ⁶ 中尾「アマゾンの愛II—ジノヴィエワ=アンニバルとパルノークにおけるレズビアニズム」, 『文学研究論集』15 (1998): 83-96 を参照。
- ⁷ *What Sappho Would Have Said: Four Centuries of Love Poems between Women*. Ed. Emma Donoghue. London: Hamish Hamilton, 1997; *Love Shook My Senses: Lesbian Love Poems*. Ed. Gillian Spraggs. London: Women's P, 1998.
- ⁸ Karlinsky 52.
- ⁹ Burgin, Diana Lewis. *Sophia Parnok: The Life and Work of Russia's Sappho*. New

中尾泰子

- York: New York UP, 1994. 107.
- ¹⁰ Taubman, Jane A. "Tsvetaeva and the Feminine Tradition in Russian Poetry." *Marina Tsvetaeva: One Hundred Years*. Ed. Viktoria Schweitzer et al. Oakland: Berkeley Slavic Specialities, 1994. 88.
- ¹¹ Burgin 1994, 112.
- ¹² Azhgikhina, Nadezhda, and Helena Goscilo. "Getting Under Their Skin: The Beauty Salon in Russian Women's Lives." *Russia — Women — Culture*. Ed. Helena Goscilo and Beth Holmgren. Bloomington: Indiana UP, 1996. 97.
- ¹³ Bordo, Susan. "The Body and the Reproduction of Femininity." *Writing on the Body: Female Embodiment and Feminist Theory*. Ed. Katie Conboy et al. New York: Columbia UP, 1997. 93.
- ¹⁴ リリアン・フェダマン『レスビアン』富岡明美・原美奈子訳，筑摩書房，1996，132。
- ¹⁵ Burgin 1994, 114.
- ¹⁶ Burgin 1994, 115-16. Саакянц, Анна. *Марина Цветаева: Жизнь и творчество*. М.: Эллис Лак, 1997. 568 でもパルノークとの関係について触れている。
- ¹⁷ Burgin, Diana Lewis. "Laid Out in Lavender: Perceptions of Lesbian Love in Russian Literature and Criticism of the Silver Age, 1893-1917." *Sexuality and the Body in Russian Culture*. Ed. Jane T. Costlow et al. Stanford: Stanford UP, 1993. 183-84; Costlow, Jane. "The Gallop, The Wolf, The Caress: Eros and Nature in *The Tragic Menagerie*." *The Russian Review* 56 (April 1997): 192.
- ¹⁸ フェダマンによれば，ヨーロッパの大衆文学は20世紀の初頭までセクソロジストたちから大いに影響を受けており，世間一般に女性同士の愛は病気，狂気，悲劇と結び付けて考えられるようになっていた。Faderman, Lillian. *Surpassing the Love of Men: Romantic Friendship and Love between Women from the Renaissance to the Present*. 1981. London: Women's P, 1997. 252.

* 関連論文として，以下も参照 — 中尾「アマゾンの愛——ツヴェターエワの『女友たち』試論」、『文学研究論集』14 (1997) : 67-80。

ツヴェターエワとレズビアニズム

Yasuko NAKAO

**Marina Tsvetaeva and Lesbianism:
From *Girlfriend* to *Letter to an Amazon***

In early Twentieth Century Russia, a number of works dealing with sex were published, partly because of the revision of legal codes in 1903, and partly because Western European texts on the new “science” of sexology were translated.

Lesbianism, until this time, had received little attention in Russia. Now the time was ripe for women writers to portray it. The first portrayals were conservative. Lidiya Zinovieva-Annibal’s lesbian novel *Thirty-three Abominations* (1907) connected lesbian love with insanity and suicide. Sofiya Parnok’s use of Sappho to represent lesbianism in her poetry tended to desexualize it.

Tsvetaeva’s *Girlfriend* (1914–15) is composed of seventeen poems. The most significant point of this text is that love between women transgresses the masculinity/femininity boundary, rendering it less precise. She thus strove to challenge the conventional heterosexual manner of reading literature.

Another important aspect of that poetry was the attitude of women toward the female body. At that time the female body was little more than an object viewed through the eyes of male authors. The speaker’s praise of her lover’s appearance involved a striking departure from the male concept of beauty traditionally imposed on women.

For Tsvetaeva, a lesbian was both a woman and a boy, as well as neither a woman nor a boy. Though the poems’ addressee was described as “masculine,” she was compared to a queen. At the same time, the speaker likened herself to a boy and was delighted when her lover called her “my boy,” illustrating the undecidability of gender. In this poetry, the speaker never seriously faced her own lesbian identity.

Twenty years after writing *Girlfriend*, Tsvetaeva dedicated to Natalie Barney, a lesbian writer, an essay entitled *Letter to an Amazon*. This work went against the stream of the times, in which lesbian writers of the 1930s began to express their sexuality more frankly. Tsvetaeva made conservative use of the word “normal,” such as “normal couple” or “normal example,” which reminds us of the sexologists’ conventional classification. She even described a lesbian couple as members of the “damned race.” Although this essay was viewed as an anti-lesbian tract, the primary focus was the incompatibility of lesbianism and motherhood. Being a mother and a lesbian presents serious social obstacles even now. For the first time in Russian Modernism Tsvetaeva perceived the dilemma of lesbian love: love without children versus children without love.